

ネットいじめ防止に有効なアプローチの検討

- いじめ加害防止の観点から -

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究生
菅野 瑤

■目的

わたしたちを取り巻く情報量は急激な技術の進歩により飛躍的に増加し、その形態は活字情報から映像を含めた電子情報へと大きく比重を移している。また、情報の形態についても、放送や新聞等のマスメディアからインターネットのようなパーソナルメディアまで多様化が進んでいる。特に、インターネットはあらゆるジャンルの情報にグローバルにアクセスすることを可能にした。

しかし、情報の恩恵を受ける側に、その情報を適切に受け止める準備ができていないのも現状である。特に、青少年においては、パソコンや携帯電話を通して、双方向の発信が増加することにもない、様々な問題が発生し、解決困難な状態に陥っているとも言われている。そうした問題の一つとして、ネットいじめが挙げられる。

そこで本研究では、ネットいじめ加害防止に有効なアプローチを探るため、ネットいじめとの関連が示唆されるライフスキル（以下LS）・共感性・メディアリテラシー（以下ML）（発信）について以下の仮説を検討することを目的とした。

仮説1) LS・共感性・ML（発信）能力の高い生徒はネットいじめ加害行動を取りにくい。

仮説2) LS・共感性・ML（発信）には相互に関連性がある。

■方法

1. 対象

2010年9-10月に、兵庫県の公立高等学校A校に在籍する高校1年生から3年生199名、兵庫県の公立高等学校B校に在籍する高校3年生158名、三重県の公立高等学校C校に在籍する高校1年生318名を対象に、無記名式の自記入式調査を実施した。

2. 主な質問項目

- 属性
- LS

（[セルフエスティーム（以下SE）]:「友人」、(桜井によるHarterの日本語版尺度),「家族」(Popeらの尺度),「全般」(Rosenbergの尺度)/[社会的スキル]（嶋田らの尺度）:「向社会的スキル」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」)

- 共感性（登張の尺度）（「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」）
- ML（発信）（高橋の尺度）（「送信時間帯の配慮」「相手の気持ちの解読可能性」「相手を配慮した反応」「返信の適切性」）
- ネットいじめ・伝統型いじめ加害経験

3. 統計的分析

（1）ネットいじめ・伝統型いじめの実態

ネットいじめ・伝統型いじめ加害経験については、A高校のデータについて、性差・学年差を比較。B高校、C高校については、性差を比較。

（2）要因分析 ※ネットいじめ・伝統型いじめ加害経験者率の高かったC高校のデータを用いた。

- ネットいじめの加害経験について、ネットいじめ加害経験なし群、ネットいじめ加害経験あり群の2群に分類し、各群のLS、共感性、ML（発信）得点を比較。
- 伝統型いじめの加害経験について、いじめ加害経験なし群、1-2種類加害経験あり群（以下低加害群）、3種類以上加害経験あり群（以下高加害群）に分類し、各群のLS、共感性、ML（発信）得点を比較。
- ネットいじめと伝統型いじめについて得点化したデータを用い、尺度間の相関係数を性別に算出。
- LS、共感性、ML（発信）の各尺度間の偏相関係数を性別に算出。
-

■結果

（1）ネットいじめ・伝統型いじめの実態

- いじめの実態について、ネットいじめ・伝統型いじめ双方で学年差は見られなかった。ネットいじめ加害経験に関して、加害経験ありと回答した者は、A高校は、男子15.1%、女子5.4%、B高校は男子9.1%、女子5.2%、C高校は男子29.2%、女子11.7%であった。伝統型いじめ加害経験に関して、加害経験ありと回答した者は、A高校は、男子33.4%、女子29.3%、B高校は男子41.8%、女子24.8%、C高校は男子80.8%、女子47.7%であった。すべての学校において、ネットいじめ・伝統型いじめ双方について、男子の方が加害経験者率が高い傾向にあった。

(2) 要因分析

- ネットいじめについて、男女共に社会的スキルの「攻撃行動」(男子： $t=-2.173$, $p=.031$, 女子： $t=-3.308$, $p=.001$)について、加害経験あり群における得点が有意に高かった。
- 伝統型いじめについて、男子においては、「SE 家族」($F=3.046$, $p=.050$)は伝統型いじめ加害経験なし群の得点が3種類以上いじめ加害経験あり群と比べて有意に高かった。「SE 全般」($F=3.722$, $p=.026$)は加害経験なし群の得点が低加害群、高加害群と比べて有意に高かった。社会的スキルの「攻撃行動」($F=12.268$, $p<.001$)は高加害群の得点が加害経験なし群、低加害群と比べ有意に高かった。女子においては、ML(発信)の「相手を配慮した反応」($F=3.506$, $p=.033$)は加害経験なし群の得点が高加害群と比べて有意に高かった。社会的スキルの「攻撃行動」($F=10.675$, $p<.001$)と共感性の「個人的苦痛」($F=3.723$, $p=.027$)は高加害群の得点が加害経験なし群と比べ有意に高かった。
- ネットいじめと伝統型いじめについては、男女共に有意な正の相関が認められた(男子： $r=.375$, 女子： $r=.378$)。
- ライフスキルと共感性の偏相関係数18のうち、男子では3、女子では7、ライフスキルとメディアリテラシー(発信)の偏相関係数24のうち、男子では1、女子では3、共感性とメディアリテラシー(発信)の偏相関係数12のうち、男子では0、女子には1つにおいて有意な相関が認められた。ネットいじめと伝統型いじめの加害経験あり群と加害経験なし群間で有意な差が見られた社会的スキルの「攻撃行動」は、男女とも社会的スキルの「向社会的スキル」と有意な負の相関があり(男子： $r=-.173$, 女子： $r=-.273$)、女子においては「SE 家族」とも有意な負の相関($r=-.248$)が認められた。

■まとめ

本研究の結果から仮説1)はLSの中の社会的スキル以外では支持されなかった。ネットいじめ防止に特化した要因があるとは考えにくく、ネットいじめ加害と伝統型いじめ加害には強い関連があると考えられるため、双方にとって有効なアプローチが必要であると考えられる。

仮説2)については、女子においておおむね支持された。社会的スキルの「攻撃行動」は男女とも社会的スキルの「向社会的スキル」と有意な負の相関が認められたことから、いじめ加害防止には特に対人関係に関わる社会的スキルが重要な要因であると考えられ、特に社会的スキルに重点を置いたライフスキル形成が有効なアプローチとなる可能性が示唆される。具体的には、相手と接したり、文章を作る中で攻撃性を抑え、怒りを感じた時の行動のコントロールについての対人関係スキルが重要であると考えられる。